



発行所
長野県松本市蟻ヶ崎
松本深志高校
新聞委員会
編集責任 福島愛美

号外

2011.10.13

連

載松本編の最後に私の母校、松本深志高校のことを書かせていただきたい。

創立は明治九年。戦前の松本中学の頃は松本城内に校舎があった。「深志」は学校に似合う名前だが市内の地名で、松本城も正しくは深志城という。戦後学制改革で男女共学高校になり、今の山手に移った。私は新制十六回卒業生で、ちょうど五十年前の昭和三十六年に入學。父は松本中学、二年上の兄も深志高校だった。

山奥の田舎のはな垂れ小僧だった私はこの高校に入り一変した。何をすることも親や先生の許可のいる中学校とちがいで、「自治」を最高価値とする深志高校はすべてが自由で、学校は生徒の自治活動を「支援」する。教室にしばらく様々な団体にいくつも入り、或いは作り、行動し、表現し、バカも真面目も、何もかもがどんどん出来た。最も血を湧かせたのは夏休み明けの学校祭「とんぼ祭」だ。「とんぼ」は「高」の字にトンボが留まる校章による。自治を旨とした生徒と学校は対等で、「今年のとんぼ祭は十日やります」と言えば学校はそうした。「しかもその前

が集中している。今年は第六十四回。三階建て三棟ある校舎は文化部系の研究創作発表、運動部系の体験教室、模擬店などすべて埋まり、中庭のステージでは常に何かが行われている。

体育館、講堂の昼は演劇公演、音楽発表など、夜の「中夜祭」は集団ダンス・独演・合唱・バンド・パフォーマンスなど何をしてもよい自由舞台らしい。

すべて二回公演する音楽発表のスケールに目を見張った。戦後間もない私の頃は楽器などは超高級の花で憧れるだけだったが、練習に余念のない部室にはあらゆる弦・金管楽器、ハーブ、ティンパニまで足の踏み場もないほどだ。そうしていくつもの音楽会を聴

ヶ月は授業にならず」と昨日居酒屋で会った古い先輩に聞いた。昔は夏休み前の「縮小とんぼ祭」で一年生を取り込み、休み明けに本番と二回もやっていた。

は不夜城となった。アカシア会という美術部にいた私は大作にいいみ、階段踊り場の大壁面を埋める壁画を共同制作。夜は校舎裏のリング農園に忍び込み、うまさうなのを……(すみませんでした)。この年代は誰もそうだと思う

ぶらり旅



第54回 松本⑥

体育館の新世界交響曲



とんぼ祭に盛り上がる、わが母校

文・写真=太田和彦

カット 村松 誠

大震災後の虚無感が抜けない私は故郷再訪を思い立ち、今は夏休み直前になった「とんぼ祭」に日にちを合わせた。自分を育てた高校の祭を五十年後の今、再び体験してみたい。

まず初日前夜に行ってみた。スクラッチタイトル貼りのアカデミックな正面棟は夜も煌々と明るく、女子が一人、椅子に上って杉葉のモニュメントアーチ作りに余念ない。木製のとんぼアクセントが気がきいている。恒例の燈籠コンクールも出そろい、灯りテスト中の大作ハリセンボンを見上げた。

「こいつはでかいな、優勝だ」「ありがとあつす」

若い奴と話すのがうれしい。

それから四日間、毎日通った。わが校はその日の授業が終わってからの学生生活「本番」で、生徒はいつまでも学校にいて部活動などに熱中した。その熱気のすべて

いた。音楽部定期演奏会、混声合唱の清澄な歌声、弦楽の加わった典雅な「ラシーヌの雅歌」。翌日の吹奏楽部八十九名による「スペイン狂詩曲」や「虹の彼方に」、ジエームス・ボンド組曲」の迫力あるサウンド。プログラムを進める女子二人のかけあい司会も楽しい。また別の日のオーケストラ演奏、深志が丘交響楽団「アルルの女」「交響曲・新世界より」の雄大なハーモニに聴き惚れる。

蒸し風呂のような暑さの体育館で、額の汗をぬぐいながらの演奏だ。三年生はこのとんぼ祭を最後にすべての課外活動から退く。花束を贈る一年女子の「先輩の厳しく楽しい指導により……」と涙ぐむ感謝の言葉は、四月に入學して

まだ三ヶ月少しにいかに密度濃い交流があったかとわかる。「三年生と一緒に演奏できる最後です」と始まる最終曲の、思いを一つに集中したすばらしき。会場を出ると今演奏を終えた総勢が渡り廊下に至らりと並び、私は思わず握手の手を伸ばした。

それだけではない。軽音楽部の発表は暗幕を張った暑い講堂に、演奏男子は女装が伝統とかで、セーラー服、メイド、朱袴の巫女さんあたりはわかるが、黒服の尼妖しげなスケスケになると際どく、深いサイドスリットのチャイナドレスに女子が「○○クーン、似合う」と嬌声をとばす。東京スカパラのナンバーがダイナミックに始まると、仮装の笑いは一変

してびしりと引き締まった。赤帯の浴衣に下駄のアルトサクスの女子が颯爽と指揮してソロをとる。フロントに歩み出たチアリーダーに裸足の女子の豪快なパリトンサククス、頭に大リボンの幼稚園児スタイル男子が吹きまくるトランペットソロが満場をわかせ、彼らが高校生であることを完全に忘れて演奏に酔った。

まだある。昼間、浴衣にバイオリン、チェロをかきつき、トロンボーンを吹きながら校内を練り歩いていた八人組は中夜祭に「情熱大陸」のバンド名で登場。ジプシー系の曲を隊列を組んだり寝そべったり、自在の演奏の楽しさにすっかりファンになった。全く凄いやつらだ。(この項つづく)

7月16日から19日まで開祭された第64回とんぼ祭について、本校のOBである太田和彦氏による記事が、サンデー毎日に掲載されました。

今現在深志生である私たちは気付かない深志の魅力が、元深志生の、客観的でありながら温かみのある文章で描き出されています。また違った視点で深志を見つめることが出来ますよ。

サンデー毎日 2011年9月15日・10月2日より全文抜粋

故郷

郷松本の学校祭「とんぼ祭」は父母、卒業生もやってきて大盛況だ。「オレたちのころはこの教室だったなあ」とつぶやく夫婦はOB同士かもしれない。私は所属した美術部・アカシア会の展示が気になったがアトリエの作品はあまり多くない。しかし絵を描く同士の気持ちはわかる。受付に女子が二人座る。

「いま何人いるの？」
「九名です」

「ぼく達の頃は三十人はいいたかな」
「え、先輩ですか？」

絵は全員出品。加えて彫塑・デザイン・建築に班分けし二会場を使って作品発表したなどの昔話を聞いてくれる。お礼に手作りのポストカードとしおりを買い、サインしていただいた。

校内至る所に生徒が車座に座り込んで屈託なく話し、精根尽きたのが床の椅子に頭を預け爆睡中だ。私のいた五十年前は女子は一割強、今は男女同数。女子は浴衣が大流行、男子は首タオルととんぼ記念Tシャツ。はち切れんばかりの若さをかきわけて歩く。

のどが渇いて弓道部の喫茶室に座った。頭にバンダナ、揃いの膳

は「〇〇」と一斉に誰かを指名すると、呼ばれた本人は意を決し、遠くから助走して猛スピードで水たまりに頭から突っ込み、そのあと皆に踏んづけられる手荒い褒美をうけて放免だ。

その熱狂を、学帽学生服に黒マント、高さ三十センチの高下駄で高い壇から応援団管理委員が腕を組み微動だにせず見守る。轆轤を立て太鼓を打ち鳴らす団員はマントの女子も多い。これほどのアナクロは昔はなく、バンカラへの憧れは増しているようだ。

「先輩」と声をかけてきたのは昨日知り合った新聞委員会のH君だ。カメラを手に取材中で「深志高校新聞」は連日号外発行で気を吐いていた。三年生と聞き「もう

脂の弓道部Tシャツの女子が盆を持ってくる。こういうことが楽しいのは昔も今も同じだ。

「何にいたしますか？」

「アイスココアをください」
「ありがとうございます」

「君は何年生？」

「一年生です」

弓道は礼儀がつくと入部した。

「深志弓道部は強い？」

「弱いです、でも私が強くなります」

見上げた返事が清々しい。

盛況の学校で先生方はどうしているかという、廊下の窓を開け

ぶらぶら旅



第55回 松本⑦ 校庭に上がった花火



泥だらけの青春、心はひとつ

文・写真=太田和彦

カット 村松 誠

職員室はパソコンを見たり、暑を打ったりとのんびりムードで、まあ生徒が勝手にやっているところからかな空気は昔と変わらない。私が好感を持ったのは、昼のステージも夜の「中夜祭」も、若い人ならやりそうな、テレビのパカタレントの真似やギャグが全く出てこないことだ。と言うよりも知らないらしい。自分のなすべき事に夢中でバカテレビなど見ていないのだろう。校風を作った名校長・小林有也の三訓の一つ「世の悪風に染むことなかれ」は着実に守られているようだ。

輪になって

最終日の夕方は恒例のファイアストームだ。展示物やポスター、看板、燈籠作品、杉葉のモニュメントなどすべてを広い校庭に集めて火を放ち、祭の終わる寂寥感とともに熱気は最高潮に達する。やや遅れて見に行くと、防火放水ホースはすでに盛大に水を噴射し、暑さの生徒はこぞつてずぶ濡れで雄叫びをあげ、走っては転び、全身泥水まみれでもはや男女もない。あちこちにできた輪の大歓声

取材なんかやめろ、君もあの泥の輪に入れ」と言うとしばらく黙り「迷ってました、そうします」と駆け出した。

大騒動の校庭も夕闇が増し、副団長女子がスピーカーを持った。

「肩を組んで輪になってくれ」
火を囲んだ大きな輪が左右に揺れとんぼ祭歌の大合唱がおきる。

「前に集まって座ってくれ」
団長の立つ壇に光が当たる。

「今から語らいの場とする、言いたいことのある者はいないか」
数名が壇に立ち「いい友達に恵まれた、深志、ありがとう！」などと呼ば、涙の絶句もある。そしてファイナルの時が来た。

「終了挨拶、生徒会長〇〇」
名前はずべて呼び捨てだ。生徒

会長が壇に上がる。

「閉会宣言、実行委員長〇〇」

実行委員長が閉会を宣言し、威厳を持って三時間立ち続けた団長が、はじめて口を開いた。

「終わりに一言、三年生はこれで深志を去る。自分が弱くなった時、行き詰まった時、今日のこの時を思い出せ。二年生一年生は俺たちを乗り越えろ！」
ウオーと全員が応えた瞬間、もはや消えたかと思えたファイアストームから花火がするすると上がって大きな光の輪が下の皆を照らし出し、轟音が響いた。

学校は翌日から夏休みに入った。とんぼ祭の妙味はむしろ終わってからにある。つき物が落ちたように三年生は口も利かなくな

り、すっかり大人に見えた。三年生の教室はシンと静まり返り、私語やエスケープ(授業抜け出し)は消え、祭の間静かにしていた先生は今ぞと授業をすすめ、全員が吸い取り紙のように講義を吸収してゆくの判る。私もそうだった。深志の生活は終わり、気持ちは来るべきその先に移っていた。

数日後H君が手紙をよこした。「勤められて泥に飛び込み、友達と肩を組み、悔いはないです。自分は理工系の国立大をめざしてがんばります」とある。有名な難関だ。健闘を祈る。

大震災後の虚無感を埋めようとやってきた故郷で私は自分の「根」を確認した。そしてその根も失われた人々を思った。